20017

慢性完全閉塞（CTO）に対する治療予後及び、患者背景・Risk factor に関する検証

[1]千葉西総合病院、[2]放射線科

林　貞治[1]、二階堂　由美[1]、阿部　翔太[1]、持田　慶彦[1]、竹内　卓矢[1]、渥美　真紀[1]、渡部　惇[1]、金子　健二[1]、大熊　吉徳[2]、廣瀬　信[2]、板倉　靖昌[2]、飯塚　大介[2]、廣野　喜之[2]、倉持　雄彦[2]、三角　和雄[2]

【はじめに】慢性完全閉塞（以下 CTO）に対する治療は Risk も高く困難ではあるが、虚血の改善の為に必要性のある治療である。また CTO となる患者を調査し、初期段階での治療が可能であればと考え検証した。

【目的】PCI における CTO に対する治療予後調査及び、患者背景・Risk factor に関する検証を行った。

【対象及び方法】2007.4.1～2011.12.31 に PCI を施行し、且つ STENT を留置した 7,440 件（男性：5,739 名・女性：1,701 名・平均年齢：68.0±10.2 歳）を対象に、CTO 患者 247 件（男性：199 名・女性 48 名・平均年齢 66.7±11.0 歳）の患者背景・Risk factor・Rotablator 施行率・再治療率を検証した。

【結果】PCI：CTO にて比較した結果、患者背景では男性 77.0%：80.6%・女性 23.0%：19.4%・平均年齢 68.0 歳：66.7 歳と差はなく、Rotablator 施行率も 22.6%：24.7%と変わらなかった。Risk factor では no Risk factor8.7%：6.9%・DM56.1%：47.8%・HT71.1%：68.8%・HL60.2%：56.7%・smoke36.3%：32.4%・HD13.5%：10.5%と大きな変化は見られず、Risk factor 罹患数でも 1 個 21.0%：23.1%・2 個 31.1%：35.2%・3 個 30.7%：25.9%・4 個 7.9%：8.5%・5 個 0.6%：0.4%と有意差は得られなかった。しかし再治療率には差が現れ、TLR10.5%：17.2%であった。

【考察】CTO 患者の TLR 率が高いのは、プラークの絶対量は多いため内腔が狭く、再狭窄率の上昇に繋がったのではないかと考える。

【結語】患者背景にて CTO となり易い患者を判断することは困難であった。よって定期的な検査の必要性は高いと、再認識する結果となった。